

てんまつんじん



御迎人形「鬼若丸」

表紙解説	
御迎人形「鬼若丸」	2頁
装束賜式・天満天神七夕祭	3頁
社殿探訪⑤	
「参集殿」	4頁
銚流神事祭場の改修	7頁
造り物「乾物の猩々舞」	9頁
第三期「天満天神御伽塾」	10頁
西山宗因、句碑	12頁

涼風進上

平成十七年 盛夏

表紙解説

義経つながりの

御迎人形キャラクター

今号の表紙をご覧になって、「牛若丸の絵で、TVの『義経』に便乗している！」と勘ぐられた方もいらっしゃるかも知れませんね。

でも、これは「牛若丸」ではなく「鬼若丸」の御迎人形なのです。「鬼若丸」は、源義経（牛若丸）の家臣であった武蔵房（坊）弁慶の幼名とされています（という事は、やはり便乗表紙かな？）。

弁慶の出生説話

弁慶は、熊野別当の子として生まれ、五条大橋で義経に出会い、安宅の関で偽りの勸進帳を読み上げて主を救い、衣川で立ち往生したなどと、その生涯は様々な逸話に彩られています。しかし、信頼できる史料としては、鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』しかありません。しかも、兄頼朝の追討を受けた義経に従う家臣として、文治元年（一一八五）十一月三日条と同月六日条の二カ所に、「弁慶法師」「武蔵房弁慶」と名が記されて

いるだけなのです。

ですから、弁慶の実在は疑えないとしても、その出自も、五条大橋も、勸進帳も、衣川も、全て後世の創作でしかありません。

では「鬼若丸」の幼名は、どこから出たかといえますと、室町時代初期に成立した物語『義経記（ぎげいき）』のようです。

同書によれば、弁慶は十八カ月も母の胎内にあり、生まれたときには二、三歳の大きさで、髪は肩までのび、大きな歯も生え揃っていたため「鬼若」と名付けられたといっています。

御迎人形、鬼若丸の出所

江戸時代の天神祭に「鬼若丸」の名で御迎人形が造られたということ、当時の人々には、弁慶の幼名は周知だったということになります。

それは『義経記』から得た知識ではなく、文楽や歌舞伎の『鬼一法眼三略巻（きいちほつげんさんりやくのみき）』によってでしょうね。

『鬼一法眼三略巻』は、享保十六年（一七三一）に道頓堀の竹本座で人形浄瑠璃として初演され、早くも翌年には歌舞伎に移されています。

このように人形浄瑠璃から歌舞伎

義経つながりのキャラクター

三大狂言のうち、『菅原伝授手習鑑』は、いうまでもなく「菅丞相」すなわち菅原道真公が主人公の物語ですが、それはさておき、「義経千本桜」からは、「源九郎狐」が御迎人形に採られています。この狐は、義経の家臣・佐藤忠信に化けて活躍するのです。文楽

や歌舞伎から採られた御迎人形には、義経の家臣が二人いることになりました。

そういえば『奥州安達原』からは義経の四代遡った祖先にあたる「八幡太郎（源）義家」が、『椿説弓張月』からは義経の叔父

に移したものは、丸本物といわれまじ丸本とは浄瑠璃の本のこと。い本だからこそ、歌舞伎に移されるということなのでしょう。そういえば歌舞伎の傑作とされる『菅原伝授手習鑑』仮名手本忠臣蔵『義経千本桜』の三大狂言も、全て丸本物です。

にあたる「鎮西八郎（源）為朝」が、やはり御迎人形に採られています。このように、義経につながるキャラクターを御迎人形のなかに探してみるのが面白いかも知れませんね。たとえTVに便乗しているといわれてもね。（文化研究所・高島幸次）



装束賜式

神童など六名に 装束と辞令が

六月二十六日午前十一時から、装束賜式が執行されました。装束賜式とは、今年の天神祭に奉仕される「神童」をはじめ、神事の中でも重

要なお役目「猿田彦」「隨身」「牛曳童児」をお願いする六人の方々へ、宮司から当日着装する装束をお渡しし、辞令を交付する儀式です。

これに先だって、午前九時から神童の自宅において「当家清祓式」が権宮司と主管講社である神針講の参列のもと厳かに斎行され、神童役を拜命する西天満の高橋家の清められた和室には天満宮の神棚が祀られ、玄関にはしめ縄が掛けられました。

装束賜式は、大阪天満宮の参集殿大広間で行われましたが、まず宮司からそれぞれお役の候補者に対して装束とともに辞令が手渡され、宮司自らご奉仕を御願

いし、続いて権宮司が、祭当日までの精進潔斎について説明を行いました。その後、神童以下の奉仕者一同は装束を着装し、記念撮影を済ませた後、本殿にご報告申し上げる「社参之儀」が斎行されました。

今年の奉仕者をご紹介しますと、「神童」には、西天満小学校五年生の高橋勇輝君（たかはし ゆうき）。

高橋家は、平成十三年にも長男伶太君が奉仕されており、お父様の高橋賢次氏も、大変名譽なことで嬉しく思います」とおっしゃっておられました。

「猿田彦」のお役には、例年通り波多野肇が奉仕されます。同氏は祖父南村八兵衛氏からこのお役を継承さ

七夕祭 ★ 星愛まつり

七月七日、本殿において午後四時から恒例の「天満天神七夕祭」が行われ、続いて境内では、神賑行事として「星愛七夕まつり」が開催されました。

本殿祭の前に星合池の畔に設けられた祭壇には大笹が立てられ「天棚機比賣大神」（あめのたなばたひめのおおかみ）が降神され神饌が供えられました。本殿祭である「天満天神七夕祭」では、宮司以下神職の奉仕によって、当宮の創祀伝承である七本松の伝承にちなみ「松の御供」と称する七種の神饌が献じられ、白

銀の天の川原に鵜かささぎの橋渡しし・・・と宮司の祝詞奏上に続いて巫女の「笹神楽」が奉納されました。氏子総代、天神祭奉仕の講社の方々などの参列者は各々祈願を記した

れ、去年は三十回目のご奉仕を勧められましたので、今年二月十三日には盛大な祝賀会が催され、ますますお元氣の様子です。

この他、「隨身」には秋田洋志さんと、永田達也さんのお二人、「牛曳童児」には吉井麻稀さんと、吉井宏之君のご姉弟が奉仕されます。

短冊を奉り、拝礼をされました

祭儀終了後の境内では、地元天神橋商店街の有志による夜店を始め大道芸コンテストなどが開催され、天神橋六丁目から商店街アーケードを行進してきた「おりひめ・ひこぼしパレード」の宮入りや、元関取大至さんによる創作相撲甚句が披露される中、約四千人の老若男女、カップルたちが参拝に訪れました。

フィナーレには、参拝者全員が音楽や照明、特殊効果によって幻想的な雰囲気演出された境内に立てられた「七つの願い茅の輪」を神職、巫女の先導で次々とぐりぬげ、星合池の七夕大神のもとへと誘われ、それぞれ願いの短冊に思い思いのことを書きしるして笹の枝に結んで、しばし真剣に祈る姿が見られました。

社殿探訪 ⑤

参集殿

参集殿注は本殿の東側に位置し、明治四十三年十月二十日、落成につき奉り上祭を行っています。

参集殿は明治末期に建築されたのですが、古い書院造りの伝統を見事に継承しています。三十畳敷の大広間と各十五畳敷の春夏秋冬の四季の間から構成されており、大広間の妻側に、上々段の間(書院)、上段の間(奥行一間・幅三間の巨大床の間)、脇床(一間半幅の違い棚・地袋)が一列に配されています。大広間の畳をあげると拭板敷きになり、座敷能ができるようになっていて、音響効果のため床下には六個の瓶が埋められています。参集殿と類似の建物は、重要文化財の西本願寺鴻の間(対面所)や飛雲閣一階の招賢殿、醍醐寺

三寶院寢殿ぐらいたということですが、平成十一年、参集殿は神楽殿・梅花殿とともに国の登録文化財に指定されました。社報第三八号に京都大学教授山岸常人氏による報告記事を掲載しております。また、御神退千百年の記念行事として社殿の修復が行われましたが、社報第四四号に修復なった参集殿内部の写真を掲載。

参集所棟札



参集所棟札 (右)表面 (左)裏面

御神退千百年にむけての修復工事の時、参集所棟札と梅花殿棟札および「天満宮梅花殿之記」の札が見つかりました。梅花殿棟札と天満宮梅花殿之記の札の写真是社報第四四号に掲載しております。

以下に参集所棟札の表面と裏面の記述を紹介します。

(表)

明治四十二年
参集所上棟安穩長久之攸
十月二十四日

(裏)

會長從三位勲一等高崎親章
寄付 天満宮 保勝 会
副會長 滋岡從長

協議員幹事
建築委員

協議員建築委員
加藤甚助

協議員
幹事

清水吉右衛門
清水平兵衛
加藤専之助
中野嘉七

参集殿 1天満宮会馆ロビーから見る1



協議員

天川三蔵 澤 卯兵衛
今井茂助 池本権右衛門
大谷藤七 杉本九兵衛
坂上新治郎 村井藤一郎
石橋庄兵衛伴井嘉右衛門
森 平輔 小松伊助
三浦市兵衛 勝浦庄次郎
丸山卯兵衛 大谷善兵衛

理事

大道久之
寺井種臣
角 正方

建築顧問

柳 信次郎

事務員 松井東三
 沖本信吾
 木下治一
 赤井寛三

番匠 柳 佶兵衛

保勝会と参集所

明治四十年四月二十二日、社地の



参集所で挙式
 花嫁はミス・リリビヤ
 トリス、ウマンさん

規模を拡張し、既設の社殿その他建造物を保存し、連歌所・渡殿・集会所の改築及び神苑等の経営を目的として天満宮保勝会が組織されました。府下管内で金五万円を募集する募金許可願いを知事に提出し、五月四日に許可されています。五月十日には、保勝会幹事選挙を行い、山中吉兵衛、和田半兵衛ら十名が選ばれました。

保勝会の募金寄付が有力な資金となり、明治四十二年四月十八日集会所（参集所）の新築地鎮祭が執り行われました。

（注）参集殿と参集所
 明治四十三年十月に落成したときの名称は参集所であり、その後もずっと参集所と称されてきた。ところが、近年梅花殿・神楽殿と並んで参集殿と称されることが多くなり、国の登録文化財の指定を受ける際参集殿とした。また、神楽殿についても明治三十三年に新築竣工したときから、神楽所と呼ばれていた。

参集殿でアメリカ女性の結婚式

当宮所蔵の古写真の中に、参集殿上段の間に神座を設けての神前結婚式の写真が一枚あります。明治が大正ごろと思われる写真に写っている花嫁さんはウエディングドレス姿で、ヴェールでお顔がよくわかりませんが、どうやら外国人女性のようです。たまたま「本殿詰所日誌」をめぐって、該当記事を見つけました。ブライバシー問題が気になりますが、もう百年以上前のことですので、日誌の文章をそのまま写します。

大正二年七月二十一日
 結婚式祭典献饌十一臺
 午前十一時執行 特等
 婿 正四位勲三等退職検事
 婿 山本辰六郎男 山本俊磨
 （嫁） キヤンテン、ジョン、ウマン、ノ代
 人トシテ后見人セシウエルキンソン
 ミス、リリビヤトリス、ウマン
 媒 米国海軍主計総監
 マクド、ナルド

写真を見ますと、神前で拝礼しているのは、媒酌人のマクド、ナルド氏と後見人のゼシウエルキンソン氏のようにです。花嫁さんは、おそらくアメリカ人でしょう。約三十年後の日米開戦のことを思うと、お二人が

幸せな結婚生活を全うされたことを祈らずにはおられません。

矢野橋村画伯

参集殿の襖絵を描く

寺井種伯宮司は「私がまだ学生だったころ、参集殿の白襖の前にどっかと座って、お酒の瓶を傍らに置いて絵筆をふるっておられた矢野橋村画伯のお姿をよく覚えていました。」と言われます。戦後の社務日誌を見てみますと、矢野画伯は昭和二十七年一月十四日に揮毫をはじめ、同十七日に仕上げ。二月十九日に門弟一人をともない揮毫。二十一日に仕上げ。三月六日から四季の間の襖絵に取りかかり、八日に仕上げ。その間に広間の絵に金粉を塗る職人が二名来ています。

このとき、矢野画伯について来られた門弟は「私です」と言われたのが、南画の直原玉青画伯です。昭和二十七年は菅公千五十年祭の年にあたり、四月二十三日から祭典が盛大に行われました。矢野画伯の参集殿襖絵揮毫は千五十年祭を記念してのことだったのです。大広間の堂々たる松の襖絵も四季の間の風景の襖絵も、現在は修復保管中で残念ながら見ることはできません。（文化研究所 近江晴子）

第二回

「黄梅祭」 齋行

去る六月一〇日、和歌山県南部川村の「大阪天満宮御神園」において、第二回「黄梅祭」が執行されました。昨年、同村の東農園内に、当宮「祖



霊祭」のお下がり用の梅を栽培する専用梅林が新設されたことは、当社報46号でお知らせした通りです。

今年も、当宮神職による収穫感謝の祭儀「黄梅祭」が齋行され、つづいて宮司以下神職・巫女らによる、収穫が行われました。

横網朝青龍当宮参拝

去る三月一三日から二七日に及ぶ大相撲大阪場所において、横網・朝青龍が全勝優勝したことは記憶に新しいことですが、実は大阪場所に先立つ三月九日、朝青龍関は当宮を参拝されました。日本相撲協会の北の海理事長と



もに横網は、本殿で参拝の後、天満宮会館ロビーで、寺井種伯宮司・寺井種治権宮司と懇談されました。私たちが日ごろ見慣れた土俵上の

厳しい表情ではなく、終始、柔和な語り口で、大阪場所にかける抱負や勝負にかける心意気などを熱く語られました。

その後、境内で記念撮影を行いました。偶然に居合わせた参拝者の皆さんは、突然の横網の姿に驚きながらも、写真や握手を求め、横網もファンサービスに務めていらっしゃいました。



鉾流祭場の改修工事が完成 平安朝の手振りを間近に

一、工事の概要

前号でお知らせしました通り、鉾流し祭場の改修工事が、大阪府の治水事業の一環として三月から着工され、今年の天神祭を前に竣工を迎えることとなりました。

今回の工事は治水事業に関する基準が全国的に緩和されたことに伴い、「スロープ堤防」方式が採用されました。それは、既存の堤防の高さを変えないでその機能が果たせるのであれば、形状については、たとえば緩やかな階段状のようなものでも新しく建設できるという考え方です。

今回の工事では、大阪天満宮所在地である祭場の境界線から、川方向に緩やかな階段状の堤防を付け、その外側となる河畔部分には平面の広場を確保して、親水区域としての広場とします。

この広場は、鉾流神事の際には祭場として使用されますので、これまで

参列員・拝観者は、目の前に横たわるコンクリート堤防のため、肝心の鉾を流す場面を見ることはできませんでした。その様子を見なければならなかったのです。

しかし、今年からは斎場からも川面を望むことができ、平安時代の手ぶりが復興されることとなります。また鉾流橋の袂からスロープをつけることによって、一般市民も私有地を通らずに親水区域に降りることが可能となります。さらに、水際の一部には砂利浜をイメージした波打ち際も造られます。

江戸時代初期の元和六年（一六二〇）から三百年間中絶していた神事は、昭和五年に復興されましたが、今回の工事は、当時の姿を取り戻すことにもなるのです。

二、アドプト・リバー・プログラム

この工事を機に、大阪天満宮は大

阪府と「アドプト・リバー・プログラム」を締結しました。

大阪府では、地域に愛され、大切にされる川づくりをめざして、自発的な地域活動を河川美化につなげるという趣旨の「アドプト・リバー・プログラム」を、平成十三年七月から実施してきました。

「アドプト」とは「養子にする」という意味で、河川を「養子」に、参加する団体を「里親」に見立てたネーミングです。すでに府下各所で、地域自治会、市民グループ、企業などが参加しています。

この度、当宮も堂島川の河川管理者である大阪府西治水事務所と、清掃美化活動の内容について協定したもので、今後、この区域は一般市民にも解放されます。

三、「鉾流神事」の復曲

祭場が昔の姿に近い形に改修されたことを記念して、今年の天神祭鉾流神事では、もうひとつの古儀が復



昭和初年の鉾流神事

興されましたが、その様子は昭和五年七月十五付『大阪天満宮社報』に掲載されています（平成五年同日発行の大阪天満宮社報『てんまてんじん』第二十四号にも再録されています）。

同記事によれば、鉦を流す際に「尸童（神童）は、社司より鉦を受け斎船に乗す、神職も伶人を従え移乗するや中流に棹さし、伶人は龍笛一管を吹奏し、神職は歌詞を唱え、古伝の秘曲を奏す。この間に尸童の捧げる神鉦を川心に投ず・・・」とあります。しかし、第二次大戦の間に、この秘曲「鉦流歌」は廃絶してしまい、戦後は浪速神楽の「大音取（おおねとり）」が代用曲として奏楽されていました。

四、「鉦流歌」の楽譜を発見

去る平成十四年、千百年大祭の記念事業として本殿ほか主要殿舎の改修工事があり、参集殿工事着工の前に戸棚の荷物を搬出してしまったところ、「鉦流歌」の記された古い紙片が見つかりました。

そこで今回の改修工事を機に、祭儀、雅楽担当の神職が関西雅楽松風会会長宮原幸夫氏と同会楽師の谷川尋彌氏の指導を受けて、復曲したのです。

楽譜に起こすうちに、その歌詞は、菅公御神詠歌「海ならずたたる水の底までに、きよき心は月ぞてらさむ」（『新古今和歌集』第十八巻）であることが判りました。歌意は、「海は底まで月が照らす、海でなくともたたえた水の底までも、私の清い心は月が照らすでしょう、無実の罪であることを天日は知るでしょう」ということです。

また、その楽曲についても「催馬楽（さいばら）」のうちの「更衣（ころもがえ）」の部分であることも判りました。ただ「更衣」は、全曲の長さが拍子十三であるのに対し、「鉦流歌」は、その前から拍子十の部分で借りた形式になっています。

一般に雅楽の曲を新作する場合、古典曲の美しい部分を使うことがよくありますが、鉦流歌のようにほぼ同曲というのは珍しいことです。

今年の天神祭は、ぜひ七月二十四日の「鉦流神事」にご参列いただき、爽やかな朝風とともに「鉦流歌」をお聞きください。

催馬楽（さいばら）とは

平安中期ごろ、各地の民謡が雅楽風に編曲された声楽曲で、神楽歌、朗詠、などととも「歌いもの」に

造り物「乾物の狸々舞」登場 昆布の袴に、干瓢の髪の毛

一、「造り物」とは??

今年の天神祭に向けて、天満天神御伽衆の皆さんが、造り物の人形「乾物の狸々舞」を造りました。御伽衆は、去る平成十四年には「御神退千百年祭」を記念して「しじみの藤棚」を造りましたが、今回は「造り物」シリーズの第二弾にあたります。

江戸時代初期の大阪で、日常的な品物を生かして、種々の人物や動物などを造り、祭礼などに飾る習慣が生れました。これを「造り物」といいます。「造り物」は、その品物の風合いを、全く別のものに見立て、その趣向や技術を競い合うところに面白さがありました。「しじみの藤棚」も、蜆の貝殻の内側の薄い紫色を藤の花びらに見立てたものです。材料は、ありふれた品物を使った方が意外性に富むことから、日常品が多く使われました。なかでも、「塗物一式」や「婚礼用具一式」などの

ように、同種の品物だけで造り上げる「一式物」は、人気が高かったようです。今回の「狸々舞」も実は「乾物」による一式物なのです。

二、造り物アイデア集

「造り物」の文化は、江戸中期には全国各地に広がり、江戸時代後期にその最盛期を迎えます。その頃、何冊かの造り物のアイデア集が出版されています。今回の「狸々舞」も安政七年（一八六〇）刊のアイデア集「造物趣向種二編」に載っています。

御伽衆は、江戸時代の当宮周辺には乾物商が多かったことに着目し、また御迎人形にも狸々があることから、乾物一式の「狸々舞」を造ることに決めたのです。

分類される。その後中絶するが、寛永三年（一六二六）後水尾天皇の命により五十七曲が復興。現在は「更衣」を含む十曲が伝承され、そのうち四曲は昭和五年の復興である。笏拍子を打ち歌を歌う役と数人の付歌、伴奏には笙（しょう）、篳篥（しちりき）、龍笛、箏、琵琶を用いる。



同書によると、面は「白干の鮑」、赤熊は「きざみするめ」、上着は「青昆布」、大口袴は「するめ」などと記されています。しかし今回の制作に当たっては、顔が鮑では人形の背丈が小さくなりすぎるので、二mを超える人形を造るために材料も工夫し、上着・袴は昆布、赤い髪の毛は食紅で染めた干瓢などを用い、顔は

能面の「狸々」をつけて出来上がり。天神祭には、本殿東側の参集殿縁側で、「しじみの藤棚」とともに御覧いただけますので、ぜひ江戸時代の大阪町人の「遊び心ある創造力」に感動して下さい。

※「狸々舞」の制作には「大阪楽座事業」の補助金を受けています。



製作途上の試着

第三期

「天満天神御伽塾」

開講

この度、第三期の「御伽塾」が、当宮梅香学院三階において開催されました。同塾では、菅原道真公・大阪天満宮・天神祭などについて、全十一講座が開講されました。担当は、大阪周辺の大学・美術館・博物館の研究者で構成している「天満天神研究会」のメンバーをお招きし、歴史学・民俗学・絵画史・音楽史・住文化史など多彩な分野から熱弁をふるっていただきました。講義テーマと担当者は、以下の通りです（一講座九〇分）。

- 《4月17日》
第一講「大阪天満宮の創祀」
高島幸次 夙川学院短期大学
- 第二講「大阪天満宮と天神信仰」
高島幸次
- 《5月8日》
第三講「天神祭の成立と発展」
高島幸次
- 第四講「絵画に描かれた天神と天神祭」
松浦清（大阪工業大学）



《5月15日》

第五講「陸渡御と船渡御」 永原順子
(大阪天満宮文化研究所)

第六講「天神縁起絵と天神信仰」
鈴木幸人(北海道大学)

《6月12日》

第七講「天神祭の講社」

澤井浩一(大阪歴史博物館)

第八講「菅原道真公の生涯」

竹居明男(同志社大学)

《6月19日》

第九講「御迎人形と造り物」

高島幸次

第十講「天神祭の聞きどころ」

網干 毅(関西学院大学)

なかには、かなり専門的な講義もありましたが、三〇名の受講生は、学生時代に戻ったように、熱心に耳を傾けていました。最後に6月26日には、天神橋筋六丁目の「大阪くらしの今昔館」に集合し、谷直樹館長(大阪市立大学)の講義の後、江戸時代の天神祭の町並みを見学、無事に御伽塾を修了しました。

第三期御伽塾6名を推薦

第三期「御伽塾」受講者の中から、六名が「天満天神御伽塾」の第三期生に推薦されました。

天神祭のボランティアガイドである「御伽塾」は、平成一二年に発足し、現在は十九名が活動しています。

しかし天神祭・船渡御では数多くの船から派遣の要請を頂き、また、春の「梅まつり」などのお手伝いなど、活動の幅も広がってきたために、人員の補充が急務となっていました。今回、推薦を受けた六名は、天神祭で実習生として活動するとともに、神職から当宮の神事についての講義(三講座)を受講した後に、宮司から正式に任命される予定です。

第十九回

天満天神研究会

「天満天神梅まつり」の最終日にあたる2月27日(日)、天満天神研究会を開催しました。今回も、文部科学省研究助成金対象の「太子信仰と天神信仰の比較史研究会」との共催で、次の二氏の研究発表をいただきました。

1、中林隆之(大阪外国語大学講師)
「藤原光明子と太子信仰」

古代国家にとって聖徳太子は王権と信仰(仏教)の関わりをとくときに、欠くことのできない存在である点や、藤原光明子の太子信仰についてもとりあげ、その後の藤原氏と太子信仰に至るまで幅広く言及されました。

2、稲城正己(仏教大学講師)
「菅原道真の詩文と仏教」

菅原道真公の詩文集『菅家文章』についての研究は、これまでは、主に国文学の分野で行われてきましたが、本発表では、同『文章』に収められた「願文」を素材として、天皇の仏教的な位置づけと、女性の果たす仏教的な役割に注目し、九世紀後半の特色を検討されました。

梅香学院受講生 中野恵理さん
文部科学大臣賞受賞

当宮の梅香学院の「書道教室」の生徒である中野恵理さんが、文部科学省認定「硬筆毛筆書写技能検定」の文部科学大臣賞を受賞されました。同教室を指導いただいている関岡松籟先生から、お祝いの言葉が寄せられましたので以下に紹介しておきましょう。



文部科学大臣賞受賞おめでとう
三月十八日、文部科学省認定「硬

筆毛筆書写技能検定」の平成十六年度優秀者表彰式が東京上野の池之端文化センターで行われ、当梅香学院の受講生である中野恵理さんが、毛筆の部で「文部科学大臣

賞」を受賞されました。十二万二千人を超える受験生のなかから、年間三名に授与されるもので、受験生と受賞者の比率を考えると、奇跡に等しいことで、学問の神、書道の神と崇められる菅原道真公を主祭神とする大阪天満宮の梅香学院で学習しているたまもので、天神さまの加護とともに本人のたゆまざる努力の实りと喜んでいきます。将来を大いに期待して喜びのことばといたします。

飽賞此情恩澤遍 有聲今亦遇花神
(訓読)新晴一碧 寺樓の春 桜朶百垂 興最も真なり 飽くまで賞す此の情 恩沢遍し 声有り今また花神に遇つと
(語釈)新晴「雨上がり。恩沢」恵み。天子さまの恵み。神仏の恵み。自然の恵み。
(詩意)雨上がりの真つ青な空、尋ねたお寺の春。桜は満開で興味の湧き湧く。この景色を飽くまで見ていると、諸々の恵みを感じた。何処かで声が出たような、あれは花を司る神様であろうか。

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村暁二撰

一月課題「年頭即事」

雪稜 松村暁二

歳旦菅家宗廟庭 數多賽客自安寧
轉眸四海悲雲覆 何處明光問列星

(訓読) 歳旦の菅家宗廟の庭 數多の賽客 自から安寧 眸を四海に転ずれば悲雲覆い 何れの処か明光ありやと列星に問う

(語釈) 菅家宗廟庭「ここでは大阪天満宮。數多「あまた、多いこと。賽客」お詣りの人。安寧「やすらか

四海」世界のこと。

(詩意) 元旦の天満宮はあまたの初詣の人・人・人、その人達は自然と安らかで有るが世界に眼を向けると悲しく成るような雲が覆っている、どこに光明があるのか黎明の星星に問いかけている

三月席題 分韻「暖日訪友」

得支 瑞峰 須磨尚子

風暄天霽百花時 訪友清談慰我思
庭院靜聞鶯語巧 歸心未起日西移

(訓読) 風暄かく天霽るる百花の時 友を訪ひ清談しては我が思いを慰む 庭院靜聞 鶯語巧みなり 帰心

未だ起らず 日西に移る

(語釈) 清談「浮世離れをした話。昔政治批判などすれば殺された時代に清談と称した集まり。今日では詩書画の話等々。

(詩意) 風は暖かくなり空も晴れたし百花が咲き乱れるとき、友を訪ね詩や書の話などして慰めとした。お庭は静かで鶯が巧みに鳴く、家に居る気もしないままに日は西に移っていた。

四月課題「治春郊行」

翠成 榊原成子

新晴一碧寺樓春 櫻朶百垂興最眞

(詩意) 南の軒端でお茶を飲んでいると、蝶が飛んできて覗いているようだ。僕が賞味しているのは凍頂茶だよ、心に深く感ずる茶を君(蝶)よ知っているかい、知らないだろう。

五月席題 分韻「南軒茗話」

得支 秋鳳 樋口達彦

南軒凭几喫茶時 紫蝶飛來窓外窺
吾輩賞味是凍頂 銘心玉露有君知

(訓読) 南軒 几に凭り 茶を喫する時 紫蝶 飛び来たりて 窓外に窺う 吾が輩の賞味するは 是れ凍頂 銘心の玉露 君知る有りや

(語釈) 凍頂「凍頂茶。中国の最高級の茶。知る「蝶に訊ねている。

(詩意) 南の軒端でお茶を飲んでいると、蝶が飛んできて覗いているようだ。僕が賞味しているのは凍頂茶だよ、心に深く感ずる茶を君(蝶)よ知っているかい、知らないだろう。

西山宗因生誕四百年記念

句碑建立奉納始末記

鷺の会会長 鈴木長駈

連歌師、西山宗因

凡そ連歌俳諧の歴史をひもとく人で、西山宗因の偉業に瞠目しない人はないであろう。連句史上画期的な新風をもたらした「談林派」の開祖、この人一度現るゝや、天下の群雄風を望んで沸き立った観すらある。

もと、肥後の藩士。寛永九年（一

六三二）主家加藤忠広の突然の改易によって浪人となり、意を決して上

京、里村昌琢に学び、連歌師として

次第に頭角を現わす。正保四年（一

六四七）、大阪天満宮で連歌所の活

動再興にふさわしい宗匠を求めてい

たところ、里村家の推奨を受けて着

任、早速、慶長末年（一六一五）

以来中絶していた月次連歌を復活す

るなど、

関西連歌

界のリー

ダーとし

て卓越し

た手腕を

揮うに至

る。

しかし、

彼の真骨

頂は連歌

に留まら

ず、同時

に傘下に

集まった俳諧師たちの信頼を得たこ

とであった。その中には井原西鶴・

菅野谷高政・岡西惟中らの名もあつ

た。宗因の「自由に基づく俳諧」は、

時に「阿蘭陀(オランダ)流」などと

罵(ののし)られながらも、これら逸

材の創造力に火を付けた。彼らのそ

の後の精力的な活動は周知のとおり

である。ただ、その自由と激情は時

に放埒を生み、やがて暴走、自爆を

遂げるに至る。そして世は「ボス

ト談林」(その代表が蕉風)の時代

に移って行く。

しかし、その立役者の芭蕉が一時

「談林」の座にいたことは注目し値

する。しかも、生涯宗因に対する敬



慕の念を忘れず、「上に宗因なくむ

ば、我々が俳諧今以て貞徳が涎をね

ぶるべし。宗因は此道の中興開山な

り。」と賛辞を惜しまない(貞徳は、

「談林」に先立つ「貞門」を創立し

た松永貞徳のこと)。

その宗因、天和二年(一六八二)七

十八歳で没する。西鶴の『好色一代

男』が出た年である。この作品も談

林の爆発的な情熱と奔流する想像力

の結晶。宗因から受け継がれたもの

が、斯く形を変えて、脈々と十八世

紀以後をも貫いて行く姿が見られる。

芭蕉の句碑に並んで

そして今年、宗因誕生(慶長十年



・一六〇五）四百年を迎える。天神様と言ひ、連句と言ひ、重なる縁に連なる我等、手を空しうしてこれを見過ごすべけんや。と言う訳で、大阪天満宮境内に記念の句碑の建立奉納が企画された訳である。

既に境内には多数の句碑があり、場所の選定も容易ではなかったが、大阪天満宮の御好意で数度の踏査の結果、境内八坂社の北側、芭蕉の梅

大阪天満宮献詠

風月社
平成十七年上半期秀歌

わが孫に寄り添ふ二歳のわが曾孫ひま

九十年経ばわがごとやなる

關俊一

うなる子のあゆみもややにととのひ

てほほゑみかはし母の手にくる

佐野秀子

伊勢土産手わたす間ももどかしく

卒業旅行の思ひ出つきず

友岡美佐子

たこ上やめんこに遊ぶ戦前の

子供の姿影なく淋し

森本美也子

諸の手を父と母にひかれつつ

親を見上ぐる子供の笑顔

鈴木敬子

咲いてよるこぶ鳥のけしき哉」碑に並べて建てる事が決まった。碑面にはこれも種々探索の結果、財団法人柿衛文庫所蔵の真筆資料「花見西行偃息図」より、「なかむとて花に

もいたし首の骨 梅翁」（「梅翁」は宗因の俳号）を複写、拡大彫刻することにした。この句、宗因の代表作と称してよく、西行の「挑むとて花もいたく馴れぬれば散る別れこそ

震災に親失ひし孤兒たちの
瞳にわれは言葉もあらず

岩城富子

七人の子等に送られ九十九なる

人生終へし母ぞ尊き

宝蔵寺京子

御垣内の玉石洗ふ縁得て

今日歌会に菅公敬ふ

松村龍太郎

千字文論語傳へし恩人の

王仁の墓とぶそのまるき石

松村曉二

師の君の石を求めて山や川

採集せし石愛しと飾る

太田たか子

夜明け待つガンジス川の舟の上

いたいけなる子の蠟燭買へり

中山里江

悲しかりけれ」（新古今・山家集）を本歌とし、「いたく」を甚しくの意から生理的な痛みに転じ、風流の裏に奇妙な実感を添えて笑い飛ばしたものである。

実は大阪天満宮には、夷門の内側の植え込みにもう一基、宗因の句碑がある。「難波津に昨夜の雨や花の春」、これも古今集・序に見える「難波津に咲くや此花冬ごもり今を春べ

滔々と流るる川の水面まで
春の氣溢る地球博の森

塩小路光孚

神さぶる大樟に若木あり

御神籤結びなにを問はまし

牛田眞理子

薬師寺の二つの塔のシルエツト

静かにくるる西の京はも

永田民子

塔二つ並び立てる薬師寺の

塔の下なる娑羅双樹はも

塩小路淳子

蒼天を突きぬくる如聳え立つ

歴史を刻む興福寺の塔

西脇かつ

万博の大地の塔の万華鏡

英知の結集に出會ひてめぐる

入江千鶴

と咲くや此花」を本歌としたもの、とも有名な作品である。この度もう一基を添えることよって、当宮との特別な縁がよる広く知られれば幸甚である。

六月一日、鸞の会会員および関係者集まり、厳肅に奉告祭、次いで現地除幕式を行った。黒御影の瀟洒な句碑が姿を現した時は胸がときめいた。是非御一見を請う。

目白來と頼みに植系し藪椿
若木となりて小鳥群來る

三本さとる

老松の雄々しき姿見上げつゝ

若木伸びびゆき次代荷ふや

小嶺利子

穏やかな日差しに新芽出揃ひて

やがて色濃き若葉とならむ

中瀬央子

堅牢な石垣の技匠にて

築かれしかな大阪城は

先山眞由美

しびき上げ水音高き雪解水

こだますばかり川沿ひの里

宮地美保子

子にまさる賣あらしな地震より

救はれし兒の笑顔わすれず

浅井與四郎

天満*天神祭昌亭

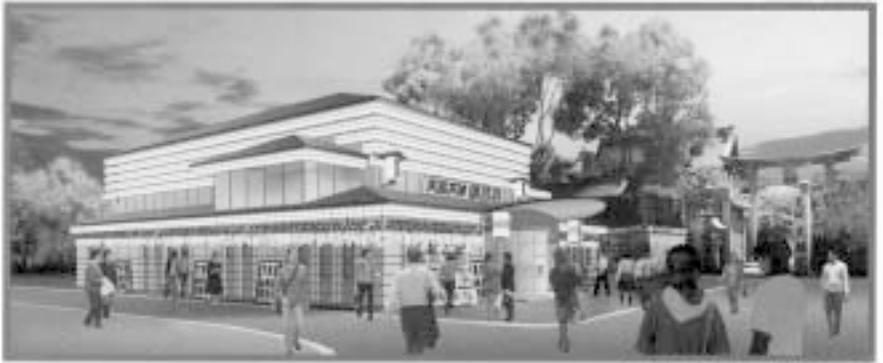
新聞・TVなどの報道でお聞きお呼びと思いますが、当宮北側（裏門を出た右手の駐車場）に、落語の定席「天満天神祭昌亭」が建設されることになりました。

上方落語は三百年の歴史を誇る上方の伝統芸能です。戦前は関西のいたるところに落語専門の定席があったのに今一軒もありません。大阪天満宮界隈には八軒もの寄席があり、様々な芸技はしのぎをけずり、上方文化が賑わっておりました。街の活性化と芸能文化の継承、発展のために、天満

に落語専門の定席を復活させたいのです。上方落語の灯を消さないために、皆様の善意の灯りをお願いたします。

天満天神祭昌亭開設準備委員会 代表
天神橋筋商店連合会 会長 土居 年樹
(社)上方落語協会 会長 桂 三枝

社団法人・上方落語協会の桂三枝会長と、天神橋筋商店連合の土居年樹会長を代表とする「天満天神祭昌亭開設準備委員会」が、広く一般市民から募金を働きかけ、ほぼ建設資



▲「天満天神祭昌亭」完成イメージ

金のめどがついたことから、本年天神祭後に着工し、来年中のオープンを目指す計画です。一年中三六五日の昼夜二部興行を行うといいますが、裏門付近が、かつての賑わいを取り戻す起爆剤となるかも知れません。周知の通り、裏門辺りは江戸時代には境内地に含まれ、芝居・講釈・軽業・手妻（手品）や茶店などが軒を連ね、大阪有数の繁華街でした。



天神祭を、火と水の祭典と呼ぶことがあります。いうまでもなく、水は船渡御の舞台である大川、「火」は夜空に打ち上げられる奉納花火と、川面を照らす無数の篝火をいいます。特に江戸時代には、打ち上げ花火のある祭礼は、いまほど多くはなく、江戸は隅田川の花火、大阪は大川の花火が有名でした。

ここで大切なのは、天神祭の花火は「奉納花火」であることです。私たちを楽しませるためではなく、年に一度、氏地を巡幸される神様への奉納の意味を込めて打ち上げられて

明治以降に現裏門の北側が境外地となつて以降も賑わいは衰えず、やがて「天満八軒」と呼ばれた寄席がしのぎを削り、道頓堀の芝居小屋とともに上方文化を支えて続けてきました。今回の定席復活により、天満が再び上方文化の中心地になり、また大阪の活性化につながるとしたら、これほど喜ばしいことはありません。



いるのです。今年も七月二十五日の船渡御には、三〇〇発の花火が打ち上げられます。つきましては、今年の船渡御に打ち上げる奉納花火の協賛金を募っております。

一口五〇〇〇円の奉納をいただいた方には、記念品として、花火（三号玉）のレプリカを差し上げています。二五日当日の午後四時まで授与所お待ちしております。

ムクドリ飛来

本年一月下旬、夕刻四時半すぎになると、大將軍社うしろのハゼノキにムクドリ(棕鳥・スズメ目ムクドリ科)が集結しはじめ、五時ごろには写真のように鈴なり状態になりました。ムクドリは全長二四センチ、とんがったクチバシと足が鮮やかな橙色で頬に白斑があるのですが、冬の宵闇せまるころ、遠目からは全体に黒っぽい鳥影にしか見えません。

その鳴き声はやかましく、キョルキョルリョリョとにぎやかです。三〇分あまり、ハゼノキで



鳥のなる木(大將軍社うしろのハゼノキ)

にぎやかに休憩したあと、三三五五飛び立ち、亀の池周辺や白米稲荷社周辺のクスノキの塹(なぐら)に移動して集団で夜を過ごします。

帰幽

末澤俊樹様
篤講講元

平成十七年四月七日
享年66歳

金行克己様
氏子総代

平成十七年六月二日
享年85歳

人事任免

《退職》

平成十七年三月三十一日付
権禰宜 桑原真澄
平成十七年三月三十一日付
巫女 末吉ひろみ

《昇進》

権禰宜に任ず
川井義晴
平成十七年四月一日付

《新任》

巫女 堀川智世



巫女 芦立紫穂奈



巫女 富田絵理



巫女 松田麻衣



平成十七年四月一日付

編集後記

去る一月二十九日から二月二十七日までの約一カ月間、第二回「てんま天神まつり」を開催いたしました。お帰りの際に、「梅まつりは、去年から私の年中行事の一つに入れていきますのよ」とお声をかけていただいた御婦人に、紙面を借りて御礼申し上げます。関係者一同、なによりも嬉しい御言葉でした。

その意味では、天神祭は大阪市民の年中行事に完全に組み込まれていくようですね。特に今年は、銚流神事の祭場が大改修されました。これまでの姿を一変し、かなり趣の変わった祭場で、「銚流歌」も復活され、平安朝の古式が再現されると思うと期待が高まります。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第48号

平成17年7月20日印刷
平成17年7月25日発行
発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530 0041 大阪市北区天神橋2-1-8

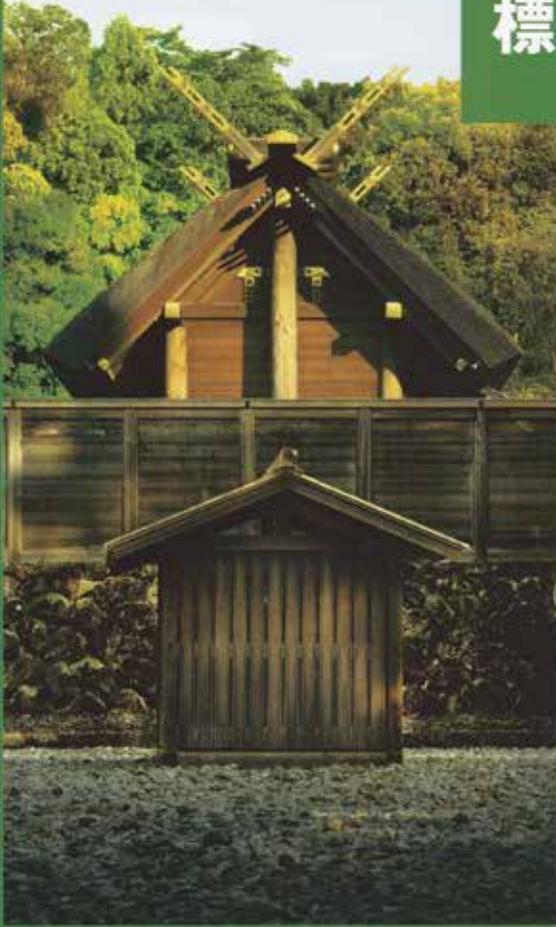
TEL 06 63353 0025

印刷所 木村印刷株式会社

伊勢神宮

式年遷宮 シンボルマーク 標語 募集

Collecting
symbolic mark and slogan
for 'Shikinen-Sengu'



20年に一度の大祭「式年遷宮」は、古例のままに御社殿を新造し、ご神室をはじめ一切を新しく築いて、ご神体をお遷しする神宮で最も重要なお祭りです。来る平成25年には第62回式年遷宮がとりおこなわれます。この大祭への理解と関心を深めていただき、「遷宮」を成功させるためにシンボルマークと標語（スローガン）を公募いたします。1300年前より連続と続いてきた古式ゆかしい日本の大祭に、国民の皆様のご協力のご賛同をお願いいたします。

The great ceremony of 'Shikinen-Sengu' conducted every twenty years is the most important ceremony of the Grand Shrines of Ise. It involves the reconstruction of the building as well as the renewal of the sacred apparatus and the treasures which are carried to the new sanctuary building according to the ancient method along with the symbol of the kami on the occasion of the Sengu, the transfer ceremony. In Heisei 25 (2013), the 62nd 'Shikinen-Sengu' will be conducted. To spread deeper understanding and interest, we would like collect symbolic marks and slogans for successful accomplishment of 'Shikinen-Sengu'. We really appreciate your cooperation to the very traditional Japanese great ceremony which has been conducted for 1300 years.

伊勢神宮
式年遷宮広報本部
公式ウェブサイト

www.sengu.info/



応募要項

●応募内容

1. シンボルマーク部門

「神宮」をイメージしたシンボルマーク

[ハガキ1枚に収まるサイズでデザインしてください。モノクロ・カラーどちらでも可。]

2. 標語部門

「式年遷宮」を成功させるための標語（スローガン）

[字数制限は特にありません。]

●応募規定

- 応募資格は問いません。どなたでも応募できます。
- 応募作品は、自作未発表作品に限ります。
- 応募作品の選考はいたしません。
- 応募作品に関する一切の権利は主催者に帰属します。

●応募方法

- ハガキまたは上記ウェブサイトから応募できます。住所、氏名、年齢、職業、性別、電話番号、作品（シンボルマークまたは標語）を明記してください。

●シンボルマーク、標語とも何点でも応募可能ですが、ハガキ1枚またはメール1件につき1作品の応募とします。

●募集期間

平成17年4月1日(金)より平成17年8月15日(月)まで 当日消印有効

●応募先・問合せ先

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-1-2 神社本庁内

伊勢神宮式年遷宮広報本部「シンボルマーク・標語募集」係

電話：03-3379-8011(代表) 03-3379-8012(直通) ファックス：03-3379-8299

●表彰

- 最優秀作品 各部門1点 賞状及び副賞(30万円・旅行ギフト券・記念品)
- 優秀作品 各部門1点 賞状及び副賞(20万円・旅行ギフト券・記念品)
- 入選作品 各部門2点 賞状及び副賞(10万円・旅行ギフト券・記念品)

●発表

10月初旬(予定)、入賞者に直接通知、ホームページ、神社新報などで発表。

●特別審査員

- 葛西敬之(JR東海会長) 平岩可枝(作家) 安藤忠雄(建築家)
- 上村淳之(日本画家) 浅野蓮子(女優) 織作暁子(カメラマン)

●主催：伊勢神宮式年遷宮広報本部 ●協力：神宮司庁・神社本庁・神社新報・伊勢神宮崇敬会 ●協賛：JTB・近畿日本フーズ・名鉄観光・日本旅行・東急観光・貴船観光・串成観光バス
●後援：日本商工会議所・日本経済団体連合会・東海旅客鉄道(JR東海)・近畿日本鉄道・伊勢市・伊勢商工会議所・伊勢市観光協会